

〈原著論文〉

民間レクリエーション団体会員の継続意欲に関する研究

赤堀 方哉* 山口 泰雄**

A Study of Adherence to Members of Non-Profit Organizations for Leisure Activities

Masaya AKAHORI*, Yasuo YAMAGUCHI**

Abstract

Despite the increasing concern with the study of leisure activities, little attention has been given to non-profit organizations for leisure activities. The purpose of this study was to examine the factors influencing adherence to members of non-profit organizations for leisure activities. The sample consisted of 358 women who were members of organizations of theater-going, called "Kodomo Gekijo Oyako Gekijo". Data for the study were collected through distribution survey with the use of questionnaire. Due to the number and variety of items, composite indicators were created and used for analysis. Four composite indicators having a significant correlation to a dependent variable were entered into a regression equation. Overall, the findings indicated that the factors influencing adherence to membership retention were age of their children, participation rate of the main programs, and their satisfaction with the sub-programs. The degree of adherence was influenced more strongly by age of their children than any other factors consisted. It was suggested that while their initial purpose of activities was for their children, it was gradually changed to their own activities.

Key Word : adherence, membership retention, NPO, leisure activities

* 神戸大学大学院 Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University
** 神戸大学発達科学部 Department of Human Development, Kobe University

抄録

レジャー活動への関心の高まりにもかかわらず、民間非営利のレクリエーション団体は等閑視されてきた。本研究の目的は、民間レクリエーション団体会員の継続意欲を規定する要因を検討することである。子ども劇場おこし劇場会員の成人女性358人に対して、質問紙調査を実施した。重回帰分析によるデータ分析の結果、継続意欲には子どもの年齢、プログラムへの参加頻度、活動に対する満足度が影響していることが示された。特に、子どもの年齢が上がるほど継続意欲が下がることが明らかになった。また、長い活動経験を持つ会員については、子どもの年齢は継続欲に影響しないということも明らかになった。これは、最初は子どものための活動であったものが、活動を続ける中で自分のための活動へと価値観を転換したためであると推察される。今後、価値観の変容が起こるプロセスの理解に関する縦断的な研究が求められている。

キーワード：継続意欲、会員資格、NPO、レジャー活動

緒言

レクリエーションとは「自由時間に自発的に行われ、楽しく社会的にも意義のある活動である」⁹⁾と一般的に定義される。レクリエーション活動は近年の余暇時間の増加に伴い、ますます多様化の様相を示している。これらの活動の一翼を担っているのが、民間非営利のレクリエーション団体である。民間非営利のレクリエーション団体はその存続を会員数の維持によっており、会員の継続参加に対する関心が高まっている。しかし、現実には会員数の維持が思うようになっていないという問題点がある¹⁰⁾。

運動・スポーツの継続意欲という概念は、Dishman(1988)⁴⁾によって初めて提唱された。その後、日本においても研究がなされてきており、その対象はスポーツイベントの参加者やボランティア、また民間スポーツクラブの会員と様々である。民間スポーツクラブ会員を対象に質問紙調査を行った原田ら(1990)⁵⁾の研究報告によれば、長期間クラブ会員を継続している者とそうでない者を比較すると、継続会員は退会者よりも年齢が高く、自己の健康管理に熱心で、

目的意識や意志の強い傾向にあり、退会者よりも満足度が高い。逆に、退会者は継続会員よりも若く、流行に敏感で、物事に対して飽きやすく、意思決定時に他人の意見に影響されやすい傾向にある。企業フィットネスプログラムへの参加者を対象にした山口ら(1989)²⁰⁾の研究によれば、既婚者のプログラム参加には家族の支持が影響しており、それは特に36歳以下の若い既婚者に顕著である。また、スポーツ参加者は職場における同僚とのコミュニケーションが高いが、地位の高い既婚者では普段のコミュニケーションの少なさの代償をスポーツ活動に求めていることが報告されている。

スポーツイベント参加者によるイベント評価に関する調査研究は非常に多い。全国スポーツ・レクリエーション祭を対象にした山口ら(1991)の研究¹⁵⁾、全国健康福祉祭に関する山口らの(1990)研究¹⁶⁾、マラソンイベントのに関する野川ら(1991)の研究⁹⁾、ウォーキングイベントに関する天野ら(1993)¹¹⁾、山口ら(1992)の研究¹⁷⁾などがある。「92' 長崎県スポーツ・レクリエーション祭」と「92' スポーツフェスタ・ふくおか」を対象とした野川ら(1993)の研究¹¹⁾によると、加齢が進むにつれてイベント運営に対する評価が高くなる、イベント運営に対する評価と将来のイベントへの参加継続意欲の間には正の相関がある、イベント参加の継続意欲を規定する要因は年齢によって異なる、ということが報告されている。これらの報告は山口らの知見¹⁸⁾である「イベントへの評価が高いほど参加継続意欲が高い」ことを支持している。

スポーツイベントのボランティアを対象にした研究においては、活動満足と継続意欲の関連を初参加者と活動継続者において比較が行われている。綿ら(1989)²⁴⁾の研究では、初参加者の方が継続意欲の低い者の割合が高いとしている。ボランティア活動の継続意欲を説明する因果関係モデルを設定し、パス解析によってモデルの妥当性を実証した山口ら(1989)¹⁹⁾の研究では、活動満足度が高いほど継続意欲が高くなるとしている。また、「指宿・葉の花マラソン大会」のボランティアを対象にした長ヶ原ら(1991)²⁾の研究報告では、ボランティア活動への興味や関心といった個人的ボランティア動機は大会運営・地域活性化への貢献などといった社会的ボランティア動機よりも継続意欲に対して強い規定力を持っていること、年齢が高くボ

ランディア経験の豊富なものほど継続意欲が高くなるということ、その一方で若年層や初参加者の継続意欲が低いということを明らかにしている。

これまで述べてきた内容をまとめてみると、継続意欲の規定要因としては以下の4点にまとめられる。

- 1) ボランティア・民間スポーツクラブ会員・スポーツイベント参加者では、年齢が高く活動経験が豊富な者ほど継続意欲は高い。
- 2) ボランティアでは、社会的動機よりも個人的動機のほうが継続意欲を強く規定している。
- 3) 民間スポーツクラブの会員の継続意欲には、家族などの重要な他者の支持が関係している。
- 4) 民間スポーツクラブ会員・スポーツイベント参加者では、プログラムに対する満足度が高いほど継続意欲が高い。

このように、継続意欲に関する研究はスポーツイベントの参加者やボランティア、及び民間スポーツクラブの会員を対象にして、研究が蓄積されてきているが、民間レクリエーション団体会員の継続意欲に関する研究がほとんど見られない。1998年3月にはNPO法が成立したことにより、今後、民間レクリエーション団体のあり方が問われ、会員数の維持が重要な関心事になってくる。そこで民間レクリエーション団体の会員の継続意欲を規定する要因の分析が求められている。

本研究では、民間レクリエーション団体の永続性をその団体の会員の継続意欲の側面から捉える。したがって、本研究の目的は、全国的な規模を持つ民間レクリエーション団体である“子ども劇場おやこ劇場”を対象にして、会員の継続意欲を規定する要因を明らかにすることである。

研究方法

1. 調査方法

子ども劇場おやこ劇場会員を対象として、質問紙調査を表1に示す項目内容によって実施した。調査期間は、平成8年9月25日から11月13日にかけて行い、10月末に未回答者に対して、電話等によるフォロー・アップを行った。質問紙の配布方法は、各劇場事務局に依頼する方法をとった。

2. 調査対象

調査対象は兵庫県の宝塚ふあみりい劇場、西宮子ど

表1. 調査項目

要因群	項目
1. サンプル属性	1. 本人の年齢 2. 子どもの年齢 3. 会員歴 4. 職業
2. 例会への参加頻度	1. 本人の参加頻度 2. 子どもの参加頻度
3. 例会以外への参加頻度	1. キャンプ 2. おやこ祭 3. 地域公演 4. ブロック活動 5. 総会
4. 子どもの例会以外への参加頻度	1. キャンプ 2. おやこ祭 3. 地域公演 4. ブロック活動 5. 総会
5. プログラムに対する満足度	1. キャンプ 2. おやこ祭 3. 地域公演 4. ブロック活動 5. 総会 6. 例会
6. 継続意欲	

表2. 劇場別会員数と人口に占める割合

	会員数	人口	人口比
宝塚	1,001	203,095	0.005
西宮	521	398,692	0.001
多可	690	11,880	0.058
ひかみ	652	19,358	0.034
合計	2,864	633,025	0.005

表3. 調査対象標本数

調査対象標本数			
劇場名	配布数		有効回収数(率)
宝塚	N	200	93(0.465)
西宮	N	200	51(0.255)
多可	N	200	139(0.695)
ひかみ	N	200	66(0.33)
合計	N	800	349(0.436)

も劇場、多可おやこ劇場、ひかみおやこ劇場の4劇場の会員である。調査対象とする劇場の抽出方法は、都市部に位置する劇場と農村部に位置する劇場とに分け、その上で都市部及び農村部の中で人口に占める会員の割合が高い劇場と低い劇場を、兵庫県の中から選んだ。各劇場の会員数と人口に占める会員の割合は表2に示すとおりである。調査のサンプルは各劇場とも、地域・属性に偏りがないように成人女性200人を有意抽出し、対象とした。表3は質問紙の回収状況を示しており、

有効回収数(率)は349票(43.6%)である。

子ども劇場おやこ劇場は、1966年に発足した児童劇を中心とする観劇団体である。その活動は、毎月千円程度の会費を集め、その会費を積み立てて3～4ヶ月に一回観劇を行う。これが「例会」である。それに加えて、キャンプ、おやこ祭り、地域公演などの「自主活動」も行っている。この「例会」と「自主活動」が劇場活動の2本柱となっている。このように、子ども劇場おやこ劇場は児童劇を中心とする観劇活動と、キャンプや祭り、バザーなどのレクリエーション活動を実施しており、民間非営利のレクリエーション団体といえよう。今日では、日本各地に約760劇場、50万人の会員を持っている。¹⁴⁾

3. 変数の設定と合成

本研究の従属変数である団体会員の継続意欲については、「これからも劇場活動を続けていきたいですか」という質問に対し、「非常にそう思う」、「そう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」による4段階尺度により回答を求めた。

独立変数は先行研究を参考にし、子ども劇場おやこ劇場の活動特性を考慮し設定した。スポーツ活動頻度が高いほどスポーツプログラムへの参加意欲が高いとした池田ら(1994)⁷⁾の研究から、本研究ではプログラムへの参加頻度を独立変数として設定した。参加頻度項目は、劇場活動の主要なプログラムである例会に対する参加頻度とその他の6つのプログラムそれぞれに対する参加頻度からなっている。長ヶ原ら(1991)²⁾の研究では、スポーツイベントのボランティアを対象にした研究では年齢及び満足度が、また、野川ら(1993)¹¹⁾、池田ら(1994)の研究⁶⁾ではスポーツイベント参加者を対象にした研究ではイベント評価が、継続意欲に対して規定力を持っていたので、本研究でも年齢及び活動に対する満足度を独立変数として採用した。活動に対する満足度項目では、参加頻度と同様に例会に対する満足度と、その他の6つのプログラムそれぞれに対する満足度からなっている。

さらに、親の劇場活動において子どもの持つ意味は大きい。子どもの存在がなければ劇場活動に参加すらしていない可能性も高いであろう。これは子どもが入会したいという意味を持ったために入会したということの意味しない。多くの場合は、親の判断で子どもの

ために、子どもと一緒に劇場活動に参加することになったのである。しかし、劇場活動にすべての子どもが関心を示すとは限らない。子どものために始めた活動であるから、子どもの反応が親の活動意欲に影響を与えることは明らかであろう。そこで、子どもに関しても年齢とプログラムへの参加頻度を変数に加えた。子どものプログラムへの参加頻度項目は本人の参加頻度項目と同様に例会の参加頻度と他の6つのプログラムの参加頻度からなっている。

以上のように、独立変数は本人の参加頻度項目(6項目)、本人の活動満足度項目(6項目)、子どもの参加頻度項目(6項目)、本人の年齢(1項目)、子どもの年齢(1項目)の合計20項目からなっている。但し、参加頻度の項目及び活動満足度の項目については、以下に詳述するように「例会以外の参加頻度」、「例会以外の満足度」という5つのプログラム得点の総和により合成されている。

独立変数の操作定義については、表4に示している。年齢は実数値をそのまま使用して分析を行っている。本人及び子どものの例会以外への参加頻度はキャンプ、地域公演、ブロック活動、総会の参加頻度の参加頻度である。活動満足度はキャンプ、おやこ祭り、地域公演、ブロック活動、サークル会、総会の満足度である。これらの参加頻度の測定については、「必ず参加する」、「よく参加する」、「たまに参加する」、「参加したことがない」の4段階尺度を用いた。活動に対する満足度の測定については「満足している」、「やや満足している」、「やや満足していない」、「満足していない」の4段階尺度を用いた。これらの変数は質的データであるが、社会学研究の分野においては、4段階尺度が等間隔尺度を構成していると仮定して量的に扱うことが通

表4. 独立変数の尺度と操作定義

項目	尺度	操作定義
本人の年齢	実年齢	
子どもの年齢	実年齢	
本人の例会への参加頻度		「4」～「1」点を5等間隔尺度を構成していると仮定
子どもの例会への参加頻度	「必ず参加する」、「よく参加する」、「たまに参加する」、「参加したことがない」の4段階尺度	
本人の例会以外への参加頻度		「4」～「1」点を5等間隔尺度を構成していると仮定
子どもの例会以外への参加頻度	「必ず参加する」、「よく参加する」、「たまに参加する」、「参加したことがない」の4段階尺度	
例会に対する満足度		「4」～「1」点を5等間隔尺度を構成していると仮定
例会以外に対する満足度	「満足している」、「やや満足している」、「やや満足していない」、「満足していない」の4段階尺度	
例会以外に対する満足度		「4」～「1」点を5等間隔尺度を構成していると仮定
例会以外に対する満足度	「必ず参加する」、「よく参加する」、「たまに参加する」、「参加したことがない」の4段階尺度	

表5. 相関マトリックス

	1	2	3	4	5	6	7	8
1.本人の例会参加頻度								
2.子どもの例会参加頻度	.6728***							
3.本人の例会に対する満足度	.2247***	.1974***						
4.本人の例会以外への参加頻度	.1476**	.0982	.2178***					
5.本人の例会以外に対する満足度	.4514***	.3089**	.2784**	.3928**				
6.子どもの例会以外への参加頻度	-.0037	.0267	.0927	.3734***	.2581			
7.子どもの年齢	-.0793	-.1145*	-.1143*	-.2088***	.0529	-.2167***		
8.親の年齢	-.0290	-.1381**	-.1590**	-.1314*	.1142	-.2271***	.6355***	
9.継続意欲	.2757***	.2440***	.3255***	.3940***	.3635**	.0605	-.2470***	-1.025*

表6. 変数一覧

従属変数	継続意欲
独立変数	子どもの年齢 本人の例会への参加頻度 本人の例会以外への参加頻度 本人の例会に対する満足度 本人の例会以外に対する満足度

例⁸⁾²²⁾²³⁾となっており、本研究でも同様に量的な変数として扱うこととする。

「例会以外への参加頻度」、「例会以外に対する満足度」の各項目に関しては、キャンプ、地域公演等の5つのプログラムの得点の総和により合成した。

4. 分析方法

全体的な関連を見るために変数間の相関マトリックスを作成した結果が表5である。「本人の年齢」と「子どもの年齢」、「子どもの例会参加」と「本人の例会参加」は内部相関が高いため多重共線性の問題を考慮して、単相関の小さい「本人の年齢」「子どもの例会参加」は重回帰分析を行う際には変数から除いた。また、「子どもの例会以外への参加頻度」は従属変数である継続意欲との相関が有意でなかったために変数から除いた。この結果、最終的に表6に示すように「本人の例会以外の活動満足度」、「子どもの年齢」、「子どもの例会以外への参加頻度」、「本人の例会への参加頻度」、「例会に対する満足度」の5つの独立変数が抽出された。

このようにして抽出した5つの独立変数に対し、継続意欲を従属変数とする重回帰分析を行い、重相関係数、決定係数、標準偏回帰係数を算出し、団体会員の継続意欲に対する各変数の規定力を分析、検討した。なお、本研究におけるデータ加工及び統計処理は統計

パッケージSPSS/PCをNEC PC-9801上で行った。

結果及び考察

1. 対象者の属性

まず、本調査のサンプルの属性における単純集計の結果は表7に示している。年齢は30代を中心とし(61.3%)、次に40代が多い(35.2%)。この二つの年代で全体の95%以上を占めている。これは、子ども劇場おやこ劇場が児童劇を中心とする観劇活動を行っており、調査対象の子どもが児童劇対象年齢である場合が多いことによるものであろう。次に、子どもの年齢であるが、これも児童劇の対象年齢である6～10歳が過半数を占め(57.9%)、11～15歳がこれに次いでいる(22.9%)。全体的には、5歳未満から16歳以上と比較的広い幅を持っているが。約8割が小中学生である。会員歴は5年以下の者が半数以上を占め(54.2%)、11年以上の者は1割強に過ぎなかった(12.6%)。職業では、調査対象を成人女性のみとしたため専業主婦が最も多く(46.1%)、ついでパート職(24.3%)、正社員(17.7%)の順であった。

表7. 対象者の属性

項目	カテゴリー	N	%
本人の年齢	30歳未満	8	2.3
	31～39歳	214	61.3
	40～49歳	123	35.2
	50～59歳	6	1.7
	60歳以上	6	1.7
子どもの年齢	5歳未満	34	9.7
	6～10歳	202	57.2
	11～15歳	80	22.9
	16歳以上	33	9.5
会員歴	5年未満	189	54.2
	6～10年	116	33.2
	11年以上	44	12.6
職業	専業主婦	159	46.1
	パート	84	24.3
	正社員	61	17.7
	その他	41	11.9

2. 継続意欲の規定要因

表8は、団体会員の継続意欲に影響を及ぼしていると思われる要因についての分析結果を示しており、重回帰分析により標準偏回帰係数の高かった順に列挙している。分析の結果、子どもの年齢($\beta = -2.61$)で1%レベルで有意性を示し、本人の例会以外の参加頻度($\beta = 0.22$)と本人の例会以外の活動満足度($\beta = 0.22$)において5%レベルで有意性を示しており、活動の継続意欲に対して規定力を持っていることが明らかになった。すなわち、子どもが小さく、本人が例会以外の活動に頻繁に参加し、高い満足を得ているものほど継続意欲が高くなるということが明らかになった。単相関では、例会への参加頻度が有意性を持っていたが、重回帰分析の結果は影響力が弱くなっている。これは会員にとって、例会への参加は基本的な活動であり、むしろ例会以外への参加頻度、満足度の方が、継続意欲に影響を及ぼしていることがわかる。最初に、子どもの年齢は継続意欲に対して負の標準偏回帰係数を持っており、子どもの年齢が上がるほど継続意欲は下がるということを示している。子どもの年齢が上がるにつれて、親の年齢も上がるわけであるから、年齢と継続意欲も負の相関を持っているといえる。これは、年齢が高く活動経験が豊富な者ほど継続意欲が高くなるとした、長ヶ原ら(1991)²⁾、山口ら(1992)¹⁷⁾の報告に反するものである。この理由は、子ども劇場おやこ劇場という活動が、子どもを中心とした活動であるので、子どもの年齢が大きく継続意欲を規定しているからであると推察される。つまり、子どもが児童劇の対象年齢を超えると、また中学生になり子どもが忙しくなると子どもと共に退会していくということが推測される。子どもの年齢が上がるにつれて、つまり、子ども劇場おやこ劇場活動の活動期間(以下会員歴)が長くなるにつれて劇場に帰属意識を強め継続意欲が高まるということはないのであろうか。

表8. 重回帰分析の結果

独立変数	標準偏回帰係数	単相関係数
子どもの年齢	-.2613**	-.2470***
本人の例会以外への参加頻度	.2215*	.3940***
本人の例会以外に対する満足度	.2158*	.3635***
例会に対する満足度	.1508	.3255***
例会への参加頻度	.0700	.2757***
重相関係数	.5199	
決定係数	.2703	

そこで、会員歴が「5年以上の人」・「7年以上の人」・「10年以上の人」に分けて、会員歴と継続意欲の関係を検討してみた。表9は、ピアソンの相関率係数を示している。継続意欲では会員歴7年以上のから正の相関に変化し、会員歴が10年以上の者では、 $r = 0.22$ を示している。前述した結果とあわせて考えてみると、興味深い結果が明かとなった。すなわち、

表9. 継続意欲と会員歴の単相関

	5年以上	7年以上	10年以上
継続意欲	-0.02	0.09	0.22
(サンプル数)	(145)	(77)	(21)

会員歴の浅いものは「子どもが何歳になったら退会しよう」という具体的な退会のイメージを持っているため、会員歴が上がるにつれてその時期が近づき、継続意欲は下がっていく。しかし、長い会員歴の中で劇場に帰属意識を得たものは、子どもの年齢にかかわらず劇場活動を続けていく傾向にある。これは、活動の中心が子どもから本人へと移ってきたことによると考えられる。

また、参加頻度及び満足度の要因も継続意欲を規定していることがわかった。これは満足度が高いほど継続意欲が高くなるという、綿ら(1992)²⁰⁾、野川ら(1993)¹¹⁾の分析結果を支持するものである。また、満足度の要因内での比較してみると、本人の例会以外への満足度が継続意欲との単相関($r = 0.364$)でも例会への満足度との単相関($r = 0.326$)を上回り、重回帰分析の結果からも強い規定力を持っていることがわかる。この結果を総合的に解釈すると、例会を目的として、つまり劇を見るために劇場会員となっている会員は、子どもが児童劇の対象年齢を超えると、子どもと一緒に劇を見に行かなくなる。その結果、本人のみの観劇のためには毎月会費を積み立てて観劇する経済的必然性が弱くなる。そして、いろいろな役割を担ったり劇場で選んだものを見るよりも、自分の見たい劇をその都度、多少高いお金を支払っても(会員外でも、割増料金で観劇できる)、見に行く方が良いと判断し退会していくことが推察される。それに対して、例会以外の活動に参加し満足を得ている者は、これらの活動は劇場活動以外では経験し難いため継続意欲が高まると解釈できる。このように、継続意欲の構成には子どもが影響を及ぼしているのである。

重回帰分析の結果、特に、子どもの年齢、本人の例会以外への参加頻度、本人の例会以外に対する満足度の3変数の寄与率が高く、これらの変数の説明率の高さを示していた。今後の団体の永続性を考えた場合、これらの結果は大きな示唆にとんでいるといえる。つまり、観劇を期待して入会してくる会員に対して、例会以外の活動を魅力あるものにし、例会以外の活動の参加者を増やすことが、会員の継続意欲を高め、団体の永続性に寄与していけよう。言い換えれば、民間レクリエーション団体における多様な活動を魅力あるものにし、一人ひとりの会員が様々な団体活動の役割を担っていくことが、会員の継続意欲を高めることにつながるだろう。

但し、本研究で用いた5つの独立変数が従属変数である継続意欲を説明する精度は27%であった。この値は高い値とは言えず、本研究で用いた変数以外にも継続意欲を規定する要因が存在することを示唆していると言える。今後、この要因を解明していくことが課題となるであろう。

まとめ

本研究の目的は民間レクリエーション団体の継続意欲を規定している要因を明らかにすることであった。このため、こども劇場おやこ劇場会員に質問紙調査を実施し、重回帰分析などの統計的手法を用いながら団体会員の継続意欲に対する規定要因を分析・検討した。分析によって得られた主な結果は以下のようにまとめることができる。

1. 対象者の属性

- 1) 本人の年齢は、30代40代を中心としている。
- 2) 子どもの年齢は、小学生と中学生であるが、年齢幅は広い。
- 3) 会員歴は、5年以下の者が半数以上を占める。
- 4) 職業は、専業主婦が半数近く、次いでパート職、正社員の順である。

2. 継続意欲の規定要因のまとめ

- 1) 子ども劇場おやこ劇場の会員においては、子どもの年齢が上がるほど、継続意欲は下がる。すなわち、子どもが児童劇対象年齢を超えると、退会していく者が多い。
- 2) 参加頻度・満足度が高いほど継続意欲が高い。すなわち、活動に頻繁に参加し、高い満足を得ているも

のほど継続意欲が高い。

- 3) 参加頻度・満足度の要因の中では、例会よりも例会以外の活動の満足度の方が継続意欲を強く規定している。

すなわち、例会よりもそれ以外の活動に頻繁に参加し、活動における役割を担うことにより、高い満足を得ているものほど継続意欲が高い。

論議

近年の自由時間の増加は著しいものがある。人生80年は、総生活時間に換算すると70万時間にもなり、そのうち労働時間は7万時間程度であり、自由時間は20万時間であるといわれる²¹⁾。このような時代において、自由時間におけるアクティブな生活スタイルの重要性が指摘されている。また、研究面においては、アクティブな生活スタイルの構築に寄与するであろうレクリエーション団体の特徴を明らかにし、それらを存続・維持させる要因に関する解明が求められている。本研究は民間レクリエーション団体に関する研究において、以下のような研究視点を投げかけている。

継続意欲の構成と活動に対する価値観の変容過程の解明が求められるということである。本研究で明らかになった「子どもの年齢が上がるほど、継続意欲は下がる」という分析結果は、活動のある程度程度の年数続けてきた会員の継続への期待度が低いことを意味している。また、「会員歴が5年以下ものが半数以上を占める」という分析結果も、団体の永続性という長期的な視点から見れば運営サイドの重要な問題点となる。これらのことを考え合わせると、会員の定着率が低いという状況が浮かび上がってくる。ただ、「会員歴が7年以上の者は会員歴と継続意欲は正の相関がある」という分析結果からは、長い活動経験の中で帰属意識を強めてきたものは、子どものための活動としてではなく、自分のための活動と価値観を変容させていると推察できる。これまで多くの研究で、活動歴が長いほど継続意欲が強いということが示されてきた。しかし、どのような活動経験が、どのように価値観を変容させてその結果として継続意欲が高まってきたという視点に欠けている。今後、継続意欲を高める価値観の変容の起こる構造とプロセスを明らかにする研究が望まれるであろう。

特に本研究で取り上げたような、子どもを対象とし

た民間非営利のレクリエーション団体では、その必要性は顕著である。というのは、子どもと親がセットで参加する活動の場合、子どもが活動の対象年齢を超えた時や、子どもが関心を示さなくなった時には、親とともに退会していくからである。もし、すべての会員が入れ替わってしまえば、それまでの活動経験の蓄積が活かされずに活動の発展が危ぶまれることになる。さらに、活動における子ども中心から親中心への価値観の変容は、単に子どものための活動から自分のための活動という価値観の変容以上のものを含んでいると思われる。すなわち、自分の子どものための活動から、自分の子ども以外の子どもの活動へという、活動に対するボランティア意識の芽生えである。自分の子どもはいないけれども、自分の子どもにしてきたことを他人の子どもにもしてやりたい、地域の子どもの地域を親として育てていきたいという価値変容によるボランティア意識の高まりを大切にすべきであろう。これは、地域の教育力の低下が叫ばれている今日において、求められている課題の一つであろう。

参考文献

- 1)天野郡寿、山口泰雄、神吉賢一、岡田明、ウォーキングイベントの参加者研究(2)ーウォーカーの期待と満足ー、*体育・スポーツ科学*、vol2、pp17-24、1993.
- 2)長ヶ原誠、山口泰雄、野川春夫、菊池秀夫、スポーツイベントのマネジメントに関する研究ーボランティアの継続意欲の視点からー、*鹿屋体育大学研究紀要*、第6号、pp69-75、1991.
- 3)長ヶ原誠、山口泰雄、池田勝、高齢者におけるスポーツ活動への再社会化に関する研究、*鹿屋体育大学研究紀要*、第7号、pp31-41、1992.
- 4)Dishman, R.K., *Exercise Adherence-Its Impact on Public Health*-,*Human Kinetics: Champaign, Ill.*, 1988.
- 5)原田宗彦、菊池秀夫、長積 仁、商業スポーツ施設における会員の継続と離脱に関する研究ー特に会員のマネジメントの視点よりー、*日本体育学会第41回大会号A*,p389、1990.
- 6)池田克紀、野川春夫、山口泰雄、室屋隆吾、青木高、体力づくりイベント参加・不参加の比較、*体力づくり情報(Trim Japan)*、No42、pp2-11、1994.
- 7)池田克紀、野川春夫、山口泰雄、室屋隆吾、青木高、健康・体力づくりイベントの課題、*体力づくり情報(Trim Japan)*、No37、pp2-9、1994.
- 8)小林久高、堀川尚子、*流動層のコミュニティ意識ーその現実と可能性*、*ソシオロジ*41(2)、pp55-73、1996.
- 9)野川春夫、菊池秀夫、山口泰雄、長ヶ原誠、*スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1)ーイベント参加者の視点からー*、*鹿屋体育大学研究紀要*、第6号、pp57-68、1991.
- 10)日本子どもを守る会編、*子ども白書1997*、p183、草土出版、1997.
- 11)野川春夫、萩祐美子、国本明德、松本耕二、*生涯スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)ーイベント運営評価と継続意欲の関連についてー*、*鹿屋体育大学研究紀要*、第12号、pp11-23、1993.
- 13)高橋和敏編著、*レクリエーション概論*、p25、不昧堂出版、1980.
- 14)高比良正司、*夢中を生きる*、p164、第一書林、1994.
- 15)山口泰雄、第3回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者調査報告書、平成2年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書、*神戸大学*、1991.
- 16)山口泰雄、野川春夫、菊池秀夫、池田勝、*生涯スポーツイベントの参加者研究ねりんピックの事例から*、*日本体育学会第41回大会号A*、p99、1990.
- 17)山口泰雄、神吉賢一、天野郡寿、岡田明：*ウォーキングイベントの参加者研究(3)ーリピーターの特性ー*、*日本体育学会第43回大会号A*、p172、1992.
- 18)山口泰雄、*リピーターの継続要因を探る*、*体育科教育*、Vol41、pp58-61、1994.
- 19)山口泰雄、菊池秀夫、野川春夫、*スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続要因の分析*、*日本体育学会第40回大会号A*、p158、1989.
- 20)山口泰雄、*ライフサイクルから見た企業フィットネス・プログラムへの参加*、*鹿屋体育大学研究紀要*、第4号、pp83-96、1989.
- 21)山口泰雄編著、*健康・スポーツの社会学*、p44、健帛社、1996.
- 22)山口泰雄、土肥隆、高見彰、*スポーツ・余暇活動とクオリティ・オブ・ライフ*、*スポーツ社会学研究*4、pp21-34、1996.
- 23) Yasuo Yamaguchi, "A Cross-National Study

of Socialization into hysical Activity in Corporate Settings: The Case of Japan and Canada” Sociology of Sport Journal 4 (1),61-77, 1987.

24)綿祐二、野川春夫、山口泰雄、菊池秀夫、スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲に関する研究—満足度が継続意欲に及ぼす影響について—、レクリエーション研究、pp48-49、1989.

25)綿祐二、山口泰雄、長ヶ原誠、野川春夫、菊池秀夫、地域スポーツイベントにおけるボランティア活動研究、日本体育学会第42回大会号A、p442、1992.